

- 江別市八幡地域では土地利用型農業を展開しているが、**小麦の連作による土壌病害が問題**となっていた。また、地域の担い手が減少する一方で規模拡大が進んでおり、**栽培の省力化や新規就農者の確保が必要**であった。
- このため普及センターでは、関係機関と連携し、**輪作の適正化と大規模経営の安定化**に取り組んだ。
- 活動の結果、作付体系の改善、土地利用作物の安定生産、水稲・大豆の省力化・コスト低減等が図られ、**対象地域の農業粗生産額が向上**した。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 作付体系の改善

- 新規作物の導入
 - ・従来の小麦・大豆に加えて、ブロッコリー、子実用とうもろこし、直播てんさいを導入し、**連作・交互作が解消**
 - ・平成30年以降、**小麦の土壌病害は未発生**

平成28～29年度

- 春まき小麦の施肥試験ほを道総研と連携して設置
- 大豆の省力栽培技術として、狭畦栽培の導入に向けた展示ほを設置
- 新規作物として、ブロッコリー、子実用とうもろこし、直播てんさいの導入を支援

2 土地利用型作物の安定生産

- 春まき小麦の施肥改善
 - ・施肥の意識改善(基肥窒素増肥)が図られ、**製品収量は市内平均以上を確保**
- 大豆栽培技術の高位平準化
 - ・基本技術の励行、主要管理技術の実践、地域版防除暦の活用により全戸が取り組み、**製品収量は市内平均を確保**

平成30～令和2年度

- 大豆栽培技術の高位平準化に向けた地域版防除マニュアルの作成
- 水稲の省力栽培技術の導入に向けた実演会、見学会の開催
- 直播てんさいの導入と基本技術定着の支援
- 「子実用とうもろこし生産・利活用の手引き」作成

3 水稲・大豆の省力化・コスト低減を実現

- 水稲の稚苗栽培・除草剤省力散布
 - ・省力栽培技術の関心が高まり、対象地域の2戸が稚苗栽培、9戸が除草剤省力散布を導入
 - 労働時間の短縮やコスト低減を実現**
- 大豆の狭畦栽培
 - ・展示ほの成績では労働時間の短縮につながり、収量も慣行と同等を確保
 - 試作を行った2戸が本格導入**

普及指導員だからできたこと

- ・土地利用型作物の安定生産では、**個別巡回や生産履歴から地域の現状を把握し、ニーズに合わせた栽培支援や試験ほを設置**したことが地域の技術改善につながった。
- ・新規品目導入にあたっては、**関係機関と連携**し、栽培実証ほ設置、生育調査、個別巡回を実施した。
- 小麦偏重型の経営から**多品目によるリスク分散型の経営に変化**
- 令和2年の**地域農業粗生産額が106%**(平成27年対比)に向上

4 青年農業者の育成

- ・**八幡青年倶楽部(8戸)が設立**され、定期的な学習会開催・個人プロジェクトを実施
- ・施設園芸の経営体による**新規参入希望者の研修受入実施**

北海道

新・八幡計画～どんな難問にも必ず答えはある！

活動期間：平成 28 年～令和 2 年度

1. 取組の背景

- (1) 石狩管内の江別市八幡地域は、水稻を基幹に小麦、大豆を含めた主要 3 品目による土地利用型農業が行われており、農業所得の維持を図るためには、主要 3 品目の栽培基本技術の励行と栽培技術の高位平準化が必要であった。
- (2) この状況の中で、当地域では平成 28 年に秋まき小麦の土壌病害が発生し、4 年以上の輪作体系の確立が不可欠との認識が高まっていた。このことから、新規作物の導入・定着による輪作体系の確立と安定生産が喫緊の課題となっていた。
- (3) 高齢化や後継者不足が進む中で、40 歳以下の経営者や後継者のいる経営体の規模拡大による労働過重が問題となっており、省力化栽培、コスト低減技術の検討や導入が必要な状況であった。

2. 活動内容（詳細）

- (1) 地域輪作体系の確立
 - ・ブロッコリー、子実用とうもろこし、直播てんさいの新規導入支援（H28～R 1）
 - ・「子実用とうもろこし生産・利活用の手引き」の作成・配布（R 2）
- (2) 土地利用型作物の安定生産
 - ・道総研と連携した春まき小麦施肥試験の実施（H28～29）
 - ・大豆栽培技術の高位平準化に向けた八幡版防除マニュアルの作成・配布（R 2）
- (3) 大規模経営の安定化
 - ・大豆狭畦栽培の導入支援（H28～30）
 - ・水稻の省力栽培技術（稚苗育苗、除草剤省力散布等）の導入に向けた実演会、見学会の開催（R 1～2）
 - ・第三者への継承支援による新規就農者の確保（R 1～2）
 - ・青年農業者の栽培技術・経営管理能力向上に向けた支援（R 1～2）



写真1 新規作物導入のポイント説明

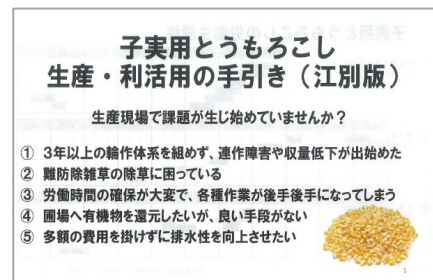


写真2 栽培推進用パンフレットの作成・配布



写真3 春まき小麦施肥試験の生育状況の確認



写真4 青年を対象とした小麦の青空講習会

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 作付体系の改善

- ・従来的小麦・大豆に加えて、ブロッコリー、子実用とうもろこし、直播てんさいを導入し、連作・交互作が解消された。
- ・平成30年以降、小麦の土壤病害は未発生となっており、農業者からは「普及センターや関係機関の支援で、地域に輪作体系が定着した。これからも秋まき小麦を安心して栽培できるように輪作に取り組みたい」との声が聞かれた。

表1 秋まき小麦作付面積減少による作付体系の変化

品目	H27 (ha)	R2 (ha)	増減 (ha)	地域の変化
秋小麦	104.7	10.6	-94.1	H30～R2年土壤病害発生なし
春小麦	57.8	103.8	46.0	新規除草剤の導入、施肥意識改善(基肥窒素の増肥)
大豆	23.5	48.2	24.7	2戸が狭畦栽培導入、防除暦の配布と市内への普及
てんさい	0.6	17.5	16.9	導入戸数の増加、基本技術定着(適正砕土、適正防除)
子実用 とうもろこし	0	4.5	4.5	4戸が新規導入、栽培組織確立
露地野菜	10.9	10	-0.9	1戸でブロッコリー定着

(2) 土地利用型作物の安定生産

- ・春まき小麦の施肥意識改善(基肥窒素増肥)が図られ、製品収量は市内平均以上を確保できるようになった。
- ・大豆栽培では、基本技術の励行、主要管理技術の実践、八幡版防除暦の活用により全戸が取り組み、製品収量は市内平均と同程度を確保した。

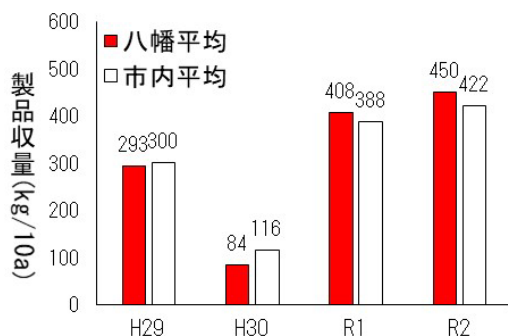


図1 春まき小麦製品収量の推移

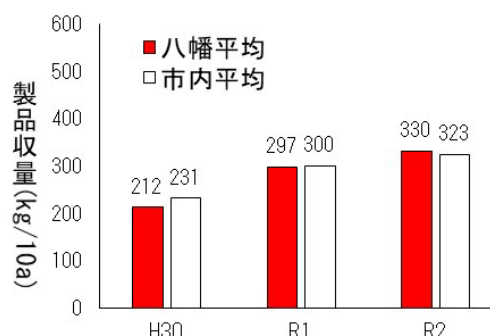


図2 大豆製品収量の推移

(3) 水稲・大豆の省力化・コスト低減

- ・水稲では省力栽培技術への関心が高まり、対象地域の2戸が稚苗栽培、9戸が除草剤省力散布を導入した。その結果、除草剤の散布時間が約半分になるなど、労働時間の短縮やコスト低減を実現した。
- ・大豆狭畦栽培では、展示ほの結果から労働時間の短縮につながり、収量も慣行と同等を確保した。この結果を青空教室や現地講習会で説明したところ、試作を行った2戸が本格導入した。

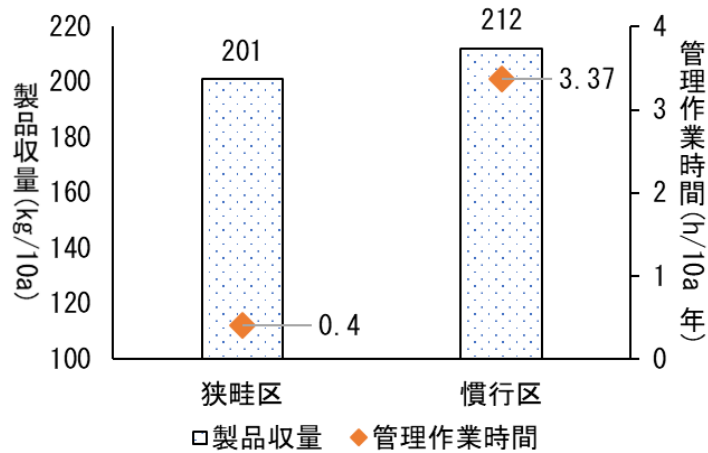


図3 大豆狭畦栽培の製品収量と管理作業時間の比較

(4) 青年農業者の育成

- ・八幡青年倶楽部（8戸）が設立され、定期的な学習会開催や個人プロジェクトを支援することで、青年農業者の自主性や主体性が向上した。
- ・施設園芸の経営体による第三者への継承を支援し、新規参入希望者の研修受入実施につながった。

4. 農家等からの評価・コメント（江別市八幡地区 Aさん）

- ・新しい技術や作物を導入するには、エネルギー（お金、時間、勇気）が要る。「八幡を江別版輪作体系のモデル地域となるよう支援したい」との提案に、地域では当初、不安視する声が多かった。しかし、普及センター、関係機関が、地域に適した技術（八幡版防除暦など）の提案、試験展示ほの設置など、一つ一つ丁寧に不安を取り除いてくれたことで、気づくと信頼関係が築かれ、「江別でトップクラスの収量を上げたい」など、前向きに取り組んでいた。地域内の技術情報の交換も活発になり、青年農業者の学習意欲も向上した。重点地域として活動できて良かった。

5. 普及指導員のコメント

（石狩農業改良普及センター 主査（地域支援） 上西 てつ子）

- ・新しいことにチャレンジするのは、不安でもあり億劫でもある。農業者の信頼と意欲を高めるために、係員は、「積極的に地域に出向く」、「農業

者の声に耳を傾ける」、「取り組み農家全戸に調査ほを設置する」など、正確な現状把握と双方向のコミュニケーションを心がけた。また、JA、試験場など関係機関と連携し、技術、組織体制（部会設置など）の強化を図ったことがスムーズな取り組みと成果につながったと考える。

6. 現状・今後の展開等

- (1) 子実用とうもろこしの生産体制を整備するとともに、農業者のニーズや経営内容に応じた支援を行う。
- (2) 八幡青年倶楽部の定期的な学習会、個人プロジェクト等の支援を継続する。